



九州日立マクセル株式会社
管理部長 総務グループ 係長
仲村 一秀さん

九マのシンボリックな建物です。

幼いときから赤レンガの近くで遊んでいたわたしにとって愛着の深い建物であり、わが社の象徴的な建物でもあります。昔、方城炭鉱で働いたかたの遺族が、遠方からはるばる位牌と遺影を持って訪れてくださったことが、とても印象に残っています。赤煉瓦記念館には、これからも変わらず、風雨にたえ続けたいと願っています。

せるむき出しの鉄骨…。同社の応接スペースとなつている2階は、西欧風の外観と調和した趣深い雰囲気を出しています。

「たび重なる台風の強風にもたえてきた頑丈な造りの建物です。レンガの柱や壁面は予想以上に粘りがあるので、耐性が強く倒れないんですよ」と、伊方の職員区で生まれ育った九州日立マクセルの仲村一秀さん。記念館は来客者の印象に残る建物として、反響が寄せられています。

赤煉瓦記念館が登録されている国の「登録文化財制度」は、残しておきたい歴史的建造物を文化財として位置づけながら保存する制度です。築50年以上が条件で、文化財指定制度とは異なり、規制は緩やかに、外観を大きく変えない限り自由に活用できるのが最大の特長。九州日立マクセルはこの利点を最大限に活用し、雰囲気や損なうことなく保存に努めています。赤レンガ記念館の見学は、平日のみの予約制。お問い合わせは同社（22）0585まで。

「マッ」と驚く扉の向こう… すこく気になる 赤レンガの内側



外観では、おなじみの人が多い赤煉瓦記念館。しかし、その中の様子を知る人はとても少ないよつです。そこで、カメラを片手に扉の向こうへとおびきましました。

まず1階は、所有者である九州日立マクセルの製品展示室。当初の懐かしい形のシーバー（電気力ミニリ）から最新式のローターリーシェイバー、イオン式のドライヤーまで、同社の歴史が凝縮されています。そして、レトロな階段を上っていくと…そこには、想像もつかなかった空間が広がっていました。重厚な内装に浮かび上がるスタンドグラス、つり下げ式でやわらかな光を放つ無数のライト、歴史の重さを感じさ



2F 九州日立マクセルの応接スペースとして利用されている2階。1階とは趣を変え、落ち着いた雰囲気を出しています。商談室やゲストルーム、喫茶室などがあり、赤レンガ記念館ならではの重厚感を満喫することができます。

1F 九州日立マクセルの製品展示室となっている赤レンガ記念館の1階。主力商品のローターリーシェイバーやドライヤーをはじめ、同社の実績や商品開発の軌跡、製品の移り変わりなどがわかりやすくまとめられ、展示されています。

主力商品のローターリーシェイバーとイオン式ドライヤー。

社内報の「赤れんが」。創業当時の会社全景と現在の正門付近。

会社創設前、日立マクセル幹部による現地視察。

九州日立マクセルの設立

旧方城町の積極的な誘致をはじめ、産地振興の要請や将来的な展望を踏まえ、九州日立マクセルは昭和45年3月に資本金5千万円で当地に設立し、7月から操業を開始しました。やがて電気力ミニリで世界初のローターリーシェイバーを開発。今や年商約130億円、敷地内では約400人が働き、中国に7か所の協力工場を有する企業へと発展しました。

現在は、シェイバーやドライヤーの開発・デザイン、精密機器やイオン水生成器の製作、医療介護分野では血液分析装置や床ずれ防止マットなども開発しています。赤レンガ記念館は、創業当初、事務所として使用されましたが、現在は同社の象徴的な建物として親しまれ、大切に活用されています。

インテリア
デザイナーによるこだわりの特注品。

スタンドグラス
最高級のガラスを使った記念館内の象徴。

鉄骨
鉄骨は戦艦などにも用いるリベット固定。

壁
当初から50cmの厚さを誇る分厚い壁。

2階の内装

著名なデザイナーがトータルコーディネートした内装は、すべて計算しつくされ、応接スペースを魅力ある空間へと演出しています。

内壁にもふんだんに赤レンガを用い、2階の天井を取り払ってむき出しになった鉄骨や屋根部分にはモスグリーンを配色。上部の空間が十分にあるため、重厚であっても開放感が感じられます。照明はやや暗めで、やわらかく温かい光に設定。鉄骨は戦艦大和などと同じ手法でボルトやナットを使わないリベット固定。インテリアも机やイスなどは特注で、床の材質や色とも調和しています。

そして、訪れた人がすぐに目を引くスタンドグラスは、最高品質のアンティークグラスを使った芸術品。その中央には社名を略した「KUM&M」の文字装飾が施されています。喫茶室から漂うコーヒーの香りもこの空間の魅力を高める要素の一つとなっています。